様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　4 月　13 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009　～ 2011
課題番号：２１５２０２４９
研究課題名（和文）19 世紀アメリカ禁酒小説研究

研究課題名（英文）A Study of the 19th-century American Temperance Narratives

研究代表者
森岡　裕一（MORIOKA YUICHI）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：２０１３５６３５

研究成果の概要（和文）：19 世紀に流布した禁酒小説のテクストを広く収集し、その分析を行った。ハリエット・ストウについては、『アンクル・トムの小屋』にみられる奴隷制度の支配と依存の関係が、彼女のもう一つの重要主題である酒への依存のモチーフと重なっていること、また、T・S・アーサーについては、彼の禁酒小説に一貫して読み取れる「説諭」と「強制」のモチーフが、人間の自由意思をめぐる問題に直結し、奴隷解放、女性参政権運動と通底するテーマを含んでいることが明らかになり、19 世紀アメリカ文化理解に新たな光を当てることができた。

研究成果の概要（英文）：I have collected many materials of the 19th-century American temperance narratives for analysis. As for Harriet Stowe, control-dependence relation found in her *Uncle Tom's Cabin* has been proved to overlap another important motif of dependency on alcohol. Concerning T.S. Arthur, the conflict between suasion and compulsion which is consistently discovered in his career of a temperance writer directly relates to the topic of man's free will, thus shedding some new light over the discussion of the19th-century American culture including the topics of slave emancipation and woman suffrage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：英米文学

１．研究開始当初の背景

(1)　応募者は、平成８年 12 月、日本アメリカ文学会関西支部第 40 回支部大会のフォーラムにおいて「酔いどれアメリカ文学」というシンポジウムを企画・実行し、好評をえた。その後同メンバーで共同研究を組織し、２年間にわたる研究成果を平成 10 年、共著『酔いどれアメリカ文学』（英宝社）として出版することができた。さらに、応募者は科学研究費補助

金の支援を受け、個人研究を継続し、数々の研究発表を行った後、それまでの成果をまとめ、平成17年9月、単著『飲酒/禁酒の物語学ーアメリカ文学とアルコールー』（大阪大学出版会）として出版し、また、同時期に出したT・S・アーサー『酒場での十夜』(2006)の翻訳・解説とともに、第一段階の研究の締めくくりをすることができた。次の段階は、禁酒小説の研究をさらに深化させ、並行して進めている家庭小説の研究と関連づけながら、19世紀感傷主義の視点から両ジャンルを統合することを計画している。

(2) 禁酒小説の先行研究に関して言えば、ジョン・クローリー、*The White Logic* (1994) やニコラス・ウオーナー、*Spirits of America* (1997) 、デヴィッド・レノルズらが編集した *The Serpent In The Cup*(1997)など、この分野のすぐれた研究は少数ながらあるが、その後、研究の進展は見られていない。また、それらの研究において、ポー、ホーソン、ディキンソンといったメジャーな作家・詩人の酒に関する作品を分析したり、注目すべき禁酒小説にのみ焦点が当たる傾向があり、本研究が意図する総体として禁酒小説を対象とする姿勢は希薄である。わが国においては酒文化に関する文化人類学や国文学など個別文学畑の研究は散見されるが、アメリカ文学に限ればほとんど未開拓の領域と言っていい。

(3) また19世紀アメリカ女性作家や家庭小説の研究については、アン・ダグラス、*The Feminization of American Culture*(1977)、ニーナ・ベイム、*Woman's Fiction*(1978)、ジェイン・トムキンズ、*Sensational Design*(1985)、デヴィッド・レノルズ、*Beneath the American Renaissance*(1988)などをはじめとする単行本が多く出ており、論文を加えると枚挙に暇がない。わが国でも、1987年の佐藤宏子『アメリカの家庭小説』を初めとして、その後も研究書は相次いでいる。また、『アンクル・トムの小屋』に特化した研究は、内外ともに今日に至るまで衰えるところがないが、それらの研究では、禁酒小説への目配りはまったくといって見られず、禁酒小説と家庭小説の二つのサブジャンルをつなぐという発想は見られない。

したがって両ジャンルをつなぐアプローチをとる本研究はこれまでにない研究領域を開拓するものと思われる。

２．研究の目的

期間内に解明を目指しているのは次の三点である。

(1) ジャンルとしての禁酒小説を総体としてとらえ、ジャンルとしての特徴、傾向を抽出する作業を通してその構造を解き明かす。対象としては、禁酒小説の黄金期とも言うべき1840年代の作品が中心になるが、夫（父）の大量飲酒―没落―（ワシントニアンによる）救済―啓蒙活動といった多くの作品に見られる典型的パタンにとどまらず、被害者としての妻に焦点をあてたもの、子どもたちが視点人物になる作品、あるいは上流女性がアルコール依存症者になる話、悪魔、亡霊を導入した語り等々、多様性に富む禁酒小説の構造を解き明かす。

(2) 禁酒運動の一翼を担うプロパガンダとしての性格の強い禁酒小説であるが、一部の作品については文学作品として鑑賞に耐えるものもあり、その面からも精読・再評価することが必要である。T・S・アーサー『酒場での十夜』(1854)などについては、すでにその方面での研究を進め、成果の発表を行ってきた。その際、昨今再評価が進むスーザン・ウオーナー『広い、広い世界』(1850)、マリア・カミンズ『点灯夫』(1854)などに代表される家庭小説を比較検討することで、19世紀感傷主義の伝統の中で禁酒小説を見直したい。アーサーの *Lost Children*(1848)、ルシアス・サージェントの短編集 *The Temperance Tales*(1852)など,職業作家の作品とアルコール依存症者自身が書いたと思われる作品群が主たる対象である。

(3) 上記の二つを統合する手段の一つとしてハリエット・ストウに着目する。禁酒小説、家庭小説の領域でともに扱われることの少ないハリエット・ストウだが、彼女の父は禁酒派の論客であったし、彼女自身、家族にアルコール依存症者を抱えてこの問題に関心が深く、「イーノック叔父さん」(1835)や、「サンゴの指輪」(1843)などの禁酒物語、あるいは、奴隷解放小説『アンクル・トムの小屋』(1852) においても禁酒のモチーフを展開している。とりわけこの小説では、禁酒小説に頻出する、幼い子供の夭折による罪深き大人の救済のモチーフが重要な場面で用いられており、禁酒小説と家庭小説を架橋する絶好の資料となっている。ストウを軸に、家庭小説との比較研究を行うことで、禁酒小説を禁酒運動に埋没させず、19世紀アメリカ文化のコンテクストにおいて新たな光を当てることを目指す。

３．研究の方法

対象領域のテクストが入手困難なものが多く、少なくとも初期段階においては、どうしても資料収集に努力を傾注する必要がある。そのうえで、禁酒小説・家庭小説という二つのジャンルの交錯の視点からテクストの分析を進める。その成果を個別に発表しながら、３年後に成果を集大成する計画である。

さらにアメリカの研究者と連携して、日米双方で成果を公開する方法を模索したい。

具体的には次の三段階を計画している。

(1) 研究を進めるうえで不可欠なテクスト入手の努力を継続する。1840 年代の禁酒小説について言えば、*Letters from the Alms-House, or the Subject of Temperance*(1841)、*The Price of A Glass of Brandy*(1841)、*Incidents in the Life of George Haydock*(1847)、*The Life and Experience of A.V. Green*(1848)など数年来、捜し求めているものの未だ入手するに至らず、本計画中にぜひ収集したく思っている。手段としては古書市場、ネット検索、米国の友人を介しての購入、インターライブラリーローン等あらゆる方法を用いるが、国内外の図書館などへ出向く作業は欠かせない。ハーヴァード大学英文科ニコラス・ワトソン教授、ペンシルバニア大学英文科デヴィッド・エスピー教授にはそれぞれの大学内図書館所蔵の資料に関し教示を受け、資料調査の許可・招待を得ている。ニューヨーク公立図書館の蔵書も貴重な情報源であり、現地へ出向いての調査が資料収集の重要な部分を占めざるをえない。テクストの収集と並行して現在入手している資料の分析も進めなければならない。その際、最新の研究動向を探るべく、この分野の指導的立場にあるアメリカの研究者、たとえば、禁酒小説分析の第一人者アラバマ大学のジョン・クローリー教授や、アメリカン・ルネッサンスの読み替えを提唱しているニューヨーク市立大学のデヴィッド・レノルズ教授らとは、引き続き意見交換したいと考えている。平成 18～平成 20 年度の科研事業で得られた成果を口頭発表、および論文の形で発表する作業も続ける。そのうち、現在、勤務校での講義で取り上げている「禁酒小説における女性の主題」については、平成 22 年３月出版予定の『玉井暲教授退職記念論集』に寄稿する論文にまとめるつもりである。

(2) 平成 22 年度以降については、21 年度に設定した研究計画をさらに発展させることが基本となる。国内外での資料収集はむろん続けなければならないが、テクスト分析作業が中心となる。分析結果について、一部を口頭発表および論文の形で公表する予定である。前述のアメリカの研究者と持続的に意見交換を続け、できれば英語で論文を発表する計画である。また、本年度までに「1840 年代の禁酒小説」「禁酒小説における女性の主題」「禁酒小説と共依存」などのテーマについては分析を完了している予定である。したがって、本年度中に、新たなテーマ、モチーフの設定をおこなう。

(3) 最終年度である平成 23 年度は研究の総括を行いたい。年度の後半には、研究成果を著書として世に問うため、少なくとも原稿を完成させたい。平成 17 年に出版した単著はアメリカ文学と飲酒/禁酒の問題を包括的に扱ったものだが、今回は禁酒小説に絞った研究書として出版するつもりである。また、できれば、MLA（アメリカ近代語協会）の年次大会を含む海外の学会で、ハリエット・ストウの禁酒小説に関する口頭発表にも挑んでみたいと考えている。そのため、ジョン・クローリー教授と共同して、MLA の年次大会で 19 世紀禁酒小説のセッションを組んでもらえるよう働きかけることを計画している。その準備も兼ね、著書の刊行の後、比較的早い段階での英語版の出版も視野に入れている。

４．研究成果

(1) 研究成果のひとつの柱は『アンクル・トムの小屋』を中心とするハリエット・ストウ研究であり、その成果は大学での講義で紹介することはもちろん、別記の２本の論文で世に問うことができた。『アンクル・トムの小屋』に見られる奴隷制度の支配と依存の関係は、ストウ文学のもうひとつの重要テーマである酒への依存のモチーフと重なっている点、また、それが男女の権力構造とも密接に関わっていることを明らかにし、ストウ文学への新たな視点を提供した。同時に、飲酒/禁酒の視点が奴隷解放、女性解放と並び、19 世紀アメリカで支配的な解放の言説を構成するものとして非常に重要な位置づけにある点を解明しえたことは、これまで光の当たってこなかった 19 世紀アメリカ精神史の側面を理解するうえで意義深いものと言える。

(2)　T・S・アーサーの研究に関してもほぼ完成段階に近づいており、19 世紀禁酒小説研究の大きな進展が見られた。その成果の一端は、後述の論文で発表することができた。論文の主旨は前期の作品ばかりが注目されるアーサーの作家活動にとって、晩年の禁酒小説の持つ意義が同様に重要であること、とくに、説諭と強制をめぐるテーマは、禁酒小説という範囲にとどまらず、幅広いコンテクストにおいて、人間の自由意思をめぐる問題に直結し、また、19 世紀アメリカの文化背景に照らしてみても、奴隷制度、女性参政権運動と通底するテーマを含んでおり、今後の研究の展開が期待できる。文学的には、「誘惑のレトリック」「侵入―排除」といった１８世紀イギリス小説由来のモチーフの流れの中に禁酒小説を位置づけることができ、同時期のサブジャンルである家庭小説との関連性を浮かび上がらせることができた。

(3)　シカゴにあるニューベリー図書館等、これまで行けなかったところに調査の対象を広げ、禁酒小説関連の貴重資料の調査を行った。その結果、多数の禁酒小説のテクストのコピーをすることができた。とりわけ、アメリカ禁酒小説の代表作家である、Lucius Sargent と Mary Chellis の作品を入手できたことは大きい。また、最新の研究動向を探るべく、ペンシルバニア大学のデヴィッド・エスピー教授、ペンシルバニア州立大学のサイモン・ブロナー教授らと親しく意見交換ができたことも大きな成果である。　なお、昨年度刊行された、研究代表者の編著書『西洋文学―理解と鑑賞』(大阪大学出版会) で担当した項にも、メルヴィルをめぐる論考など、本研究過程で得られた知見が盛り込まれ、研究の副産物としての意義は大きい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①森岡裕一、「説諭と強制―T・S・アーサーの後期禁酒小説」大井浩二監修『異相の時空間』(英宝社)、査読有、2011.5.10. 57～72.

②森岡裕一、「リグリーの怯え―『アンクル・トムの小屋』における男女の力学」『英米文学の可能性』(英宝社)、査読有、2010.3.15. 641～652.

③森岡裕一、「ボトルと奴隷―『アンクル・トムの小屋』における支配と依存」山下昇編『メディアと文学が表象するアメリカ』((英宝社)、査読有、2009.10.20. 56～77.

〔図書〕（計１件）
森岡裕一編著、大阪大学出版会『西洋文学―理解と鑑賞』(2011)、256 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
森岡　裕一(MORIOKA YUICHI)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：20135635

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし